



故 瀬 古 一 光 先生

瀬古一光先生（2011年11月24日永眠，88歳）

▷略 歴◁

1923年6月25日	出生
1943年9月	京都高等工芸学校人造纖維科卒業
1943年9月～1945年9月	富士写真フィルム株式会社勤務
1946年9月～1946年11月	京都工業専門学校化学工業科勤務
1946年11月～1951年3月	京都工業専門学校助教
1951年4月～1959年1月	京都工芸繊維大学工芸学部助手
1959年2月～1962年3月	京都工芸繊維大学工芸学部講師
1959年4月～1962年3月	同志社女子大学嘱託講師
1962年4月～1965年3月	同志社女子大学専任講師
1965年4月～1969年3月	同志社女子大学助教授
1969年4月～1989年3月	同志社女子大学教授
1972年4月～1974年3月	同志社女子大学家政学科主任
1973年4月～1975年3月	同志社女子大学家政学部長
1975年4月～1978年3月	同志社女子大学教務部長
1989年4月	同志社女子大学名誉教授
1989年4月～1995年9月	同志社女子大学嘱託講師

▷主な担当科目◁

「染色学」, 「被服材料学」, 「被服整理学」, 「被服学概論」等

▷所属学会◁

日本化学会, 日本繊維学会, 日本家政学会, 日本繊維製品消費科学会, 同志社女子大学生生活科学会

瀬古一光先生を偲んで

平成 23 年 11 月 24 日、瀬古一光先生が 88 歳でご逝去されました。

先生は大正 12 年 6 月、三重県のお生まれで、京都工芸繊維大学工芸学部専任講師として勤務され、昭和 34 年 4 月から同志社女子大学の嘱託講師として週 16 時間も担当されました。昭和 37 年から専任講師として入社され、平成元年 3 月にご定年退職され、名誉教授の称号を受けられました。本学には、専任として 26 年、嘱託講師としての 8 年を合わせて 34 年の長きにわたりお勤めになりました。

先生のご専門は繊維化学と染色学で、関連の実験などを含めて数多くの科目をご担当になり、主に絹の堅牢染色のご研究を深められました。

先生は女子大学に來られて間もなく、老朽化した家政館が漏電で焼失するという大きなアクシデントに見舞われました。そこには被服関係の大西マサエ先生と共用された実験室兼衣服実習室（研究室を含む）がありました。着任に際して前任校から少しづつ自転車で運ばれた多くの貴重な研究資料や実験データ、自費出版された 1000 冊の教科書も灰燼に帰してしまいました。その時の先生のショックと落胆はいかばかりであったことかと思われまます。

先生は着任して間もなく教務主任を務められましたが、3 年半の在任中は、学芸学部家政学専攻から家政学科への改組、家政学部大学院設置のための家政学部独立など、大きな変革期と重なりました。当時の教務主任は、現在の入学、広報、企画、教務の仕事に兼務するようなもので、かなりの仕事量でした。後年、先生は受験生を集めるために、強行スケジュールで全国の高校によく出かけたという当時の苦労話をされました。私が受験した頃には、本学は知名度も高く、多くの受験生を集めていましたので、そのような時代があったこと自体、信じられない思いでした。

さらに家政学科主任、家政学部長、食物学科主任代理、教務部長を次々と兼任され、図書館建設、心和館第 2 期工事など大学全体の発展期に重責を担われました。教務部長の任が解かれた半年後、その間のご無理やストレスから鼻出血で緊急入院されるなど、一時ご体調を崩されました。

先生といえば「お酒」という言葉が浮かぶほど、日常的にお酒を嗜まれていましたが、ご病気をされてからは心機一転、一気に健康志向へ転換されました。たばこをやめ、休肝日をとり、甘いものは一切口にせず、玄米中心の食事療法、適度の運動で健康を取り戻して行かれました。

そしてお昼時になると、先生の研究室から良いにおいが漂ってくるようになりました。研究室で野菜や煮干しなど 30 品目の食材を細かく刻んで炊き上げた減塩雑炊をご自分で作って召し上っておられたのでした。後にはその食事を 1 日 3 回もされていると伺い、本当に健康に気を使われていることを知りました。

それでもご自身で不安を抱えていられたのか、60 歳頃から「自分は化石だ」、「来年生きていかどうかかわからない」などとしきりにおっしゃるようになりました。しかしその後も先生は大変お元気で、10 年程前から心臓を悪くされていたとはいえ、88 歳のご長命であられたことは、特製の雑炊がまさに究極の「ご長寿食」であったといえるでしょう。

私が先生に初めてお会いしたのは、大学 1 年の必修科目「被服学概論」の授業の時でした。先生は 1 講時の開始時間よりかなり早くから教室に入り、教壇の椅子に座り、教室に入ってくる学生をじっと待って見ておられました。学生にとっては遅刻しにくく、授業も試験も化学が苦手な者には大変難しいものでした。しかし染色実験では、様々な素材や媒染剤を用いて染めた試験布を貼付して色見本帳を作製したり、ロウケツ染めや革染めの作品を作ることもあり、とても楽しいものでした。

先生はご自分の娘位の年頃の学生を教えた頃（つまり私の世代）が一番厳しくて、後に孫の様な年頃の学生に接する頃には、本当に甘くて優しく、先生曰く「私の瀬古」になられていました。そして、サマーキャンプにもよく参加され、キャンプで着る揃いの T シャツを事前に染めることが恒例になりました。私も手伝いを兼ねてよく参加させて頂きましたが、先生は学生と一緒に作業をしていること自体が本当に嬉しそうでした。

今頃、どこかでまた白衣を着て、あの張りのある大きなお声で学生を指導しながら、染色実験をされているのでしょうか？ あの独特の酢酸のにおいと共に…。そんな気がしてなりません。

瀬古先生、本当にこれまでありがとうございます。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

服飾文化研究室 清水久美子